

氏名(本籍)	ホンラド・R・フェルナンデス (フィリピン)		
学位の種類	学術博士		
学位記番号	博甲第584号		
学位授与年月日	昭和63年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当		
審査研究科	芸術学研究科		
学位論文題目	製品計画デザイン・カリキュラムの開発に関する研究 —第3世界(フィリピン)における人間的生産性, 経済的平等, 社会的協調, そして生態的均衡の促進に向けて— A Study on Generating a Curricular Programme in Product Planning and Design —Orientend Towards Promoting Human Productivity, Economic Equity, Social Harmony and Ecological Balance in a Third World Country—		
主査	筑波大学教授		吉岡道隆
副査	筑波大学教授	工学博士	栗原嘉一郎
副査	筑波大学教授		嶋田厚
副査	筑波大学教授	工学博士	土肥博士
副査	筑波大学教授		宮脇理

## 論文の要旨

本論文は広義の生産デザイン教育を通じ地域における人的資質と生産性の向上を図ることにより、その成果が社会構造の変革、より健全な地域政策の確立に寄与し得ると言う論点に立って考察されたものである。すなわち、1950年代から60年代の国際協調による低開発地域援助施策は一国民所得の増大は投資の増大による—とするマクロ的成長モデルに準拠し、先進工業地域から後進地域への資本、技術移転を中心的課題とした。しかし、結果はそれら地域の文化社会を皮相的な西欧化に落とし入れ、開発地域住民の依存心を増大させ、人口の無策な都市集中によりインフォーマル・セクターをまん延させ、都市・農村の所得格差を拡大し、経済成長過程での所得配分不平等、天然資源の枯渇、国際金融機構等からの借款も返済不可能な額に達し、国家間の政治的課題にまで発展した。続く70年代は前輪を返り見て中間技術論、適正技術論等多くの低開発地域計画概念が起想された。しかし、それら概念は基幹資源を必要とする高度工業化を確立しつつある北の論理であり、たんに機能的技術的側面や資金援助による開発は、それら地域社会の実質的生活からの内発的發展にはなり得なかった。本論文の視座は近代文明を包括しながらも地域の社会的・文化的素因をより良く止揚する教育実施—生産デザイン教育—によって内発的起動力を協力援助の適正活用をふまえて確立

することを志したものである。

論文の構成は大きく3部に分かれる。第1部は「研究にあたっての考察」という包括的題目でまとめられた3章よりなる。第1章は「研究の背景」と題した問題提起、第2章は「研究計画とその摘要」であり、第3章は本研究に必要な「理論研究」である。第2部は本研究の中核をなす部分で、4、5、6章によって編成されている。第4章は前章の展開を受け、「一般研究」という副題のもとに世界的視座に立って工業デザインの教育、実践、教科課程に対し、史的考察、解析、評価を行った。

第5章では「特定研究」の名のもとに発展途上地域各国に内在する諸問題に言及し、前記の研究結果と対応させ考察した。第6章は研究者自身の母国であり、現職域であるフィリピン共和国ならびに国立フィリピン大学を「事例研究」の対象として取り上げ、さらに詳細な修士課程教科内容の考察に及んだ。

第3部、7章は前述各章の副次的結言の総括を行い、本研究から導き出された結論をまとめ、将来の展望に及んだのが本論文の全体構成と骨子である。

第1部、第1章「研究の背景」は世界的、国家的、個人的と3段階にわたる視座により問題の背景が論じられている。すなわち、近代化を確立しつつある社会の物質的、経済的繁栄の素因は高度工業化の成果によるものであることを指摘し、特に近年その成果に寄与しつつある工業デザイン＝ID活動の社会的意義と価値を論じている。国家的レベルでは開発途上諸国の現況に焦点をあて、そうした第3世界もまた政治的イデオロギーの如何を問わず近代化に迫られる現実に言及している。そして、その近代化とは、たとえ外資の投資を得たとしても、その資源と種類に限界がある絶対条件と低賃金労働によった輸出収支では、工業化が購い得ない矛盾が実在することを強く指摘している。他方、そうした現実にもかかわらず、第3世界での生存と活性化のために、永い資本主義社会の伝統に根ざして発生、展開をとげたデザインの手法が無批判に第3世界に受け入れられていることを論じ、さらにフィリピン共和国の現状に言及している。第2章では複雑、多岐にわたる素因を含む問題をたんに定量的に処理し得ない点を論じ、本研究の目的、意図、仮説と分析方法を含んだ方法論を示した上で、本研究の中核をなす第2部、4、5、6章の構造化を図っている。第3章の「理論研究」は第1章の問題提起を受け、第2章で規定した研究計画とその摘要（第2部4、5、6章）をふまえ、第1節は「地域国家発展」、「工業化と近代化」の現在に至る過程で実践、策定、論議等の多岐にわたる資料、文献を通じた考察の結果、Robert Riddellの提案する相互依存による発展理論の有効性を指摘している。第2節「教育」ではその哲学から5項目にわたる教育展開理論を抽出し、生産性向上の工業技術教育の現状と将来を示唆している。第3節は「デザイン」に関する広義の解釈、その史的考察から工業デザインの発生と展開を論じ、近代造形運動中のDWBやBauhaus設立にあたってのWalter Gropius宣言にふれ、当時の工業デザインに対する主眼、限界と可能性をも指摘している。

第2部、第4章「一般研究」の第1節は工業化による国の発展理論と同調した工業デザイン教育を論述し、前章の5項目にわたる教育展開理論と工業化教育の重複が南、北（開発途上と高度工業

化社会)にもたらず経済的不均衡, 社会的な不協和, 生態的アンバランスを論ぱくしている。第2節では現状における工業デザインの実践が, あまりにも工業化の促進にのみ協調し, 時には消費のみをうながす必要以上の製品までも生産し, より良き生態的バランスの為に製品が共存し得る状況を逸脱している場合すらありうることを示唆し, 将来に向けての新たなVisionを求めている。第3節はその「教育と訓練」に対しより詳細な史的考察から出発し, Bauhaus宣言が示した当時の教科内容の限界を詳細にふれ, それから49年後の1967年 UNESCOの要望に従って国際工業デザイン審議会(International Council of Societies of Industrial Design=ICSID)教育部会が提案した教科目を示し, その教科内容も技術・市場情報, 造形, 視覚伝達技法の3側面によって立てられ, 現代から将来に対応し得る人間, 社会, 環境, 文化, 生態等に関する諸教科因子の欠如を指摘している。

続く第5章の「特定研究」では前提となった各章の総括に立脚し, 人的資質と生産性の向上には経済的均衡, 社会的協調, 生態的バランスの必要を説き, 新たな生産デザイン(計画, 機器設計, 生産方法, 技術)の教科設定に向けて考察を展開した。また, 世界11ヶ国主要大学の工業デザイン教科内容を比較解析し, 工業化と密着した高度工業化社会における教育がデザイン領域の拡大にもかかわらず, 前記ICSID提案からあまり変革していないばかりか, かえって専門形がい化しつつある現状を実証している。

第6章「事例研究」の第1節はフィリッピン共和国の現況を人的資質, 技術, 資源, 伝統, 環境, 風土等の観点から解析, 評価しその潜在力を確認した。第2節は現在のフィリッピンに於けるデザイン教育把握の上から立って, 工業化の途上にある大学教育の上から新たな生産デザイン教科の策定を考察した。第3節ではプランナー, デザイナー, リサーチャー, 教育者, 指導者等の育成に必要な教科領域を示し, 高等教育における基礎課程, 専門領域の必修, 選択と特別研究の詳細にわたったカリキュラム提案を行っている。第3部, 7章の結論と総括, 展望は本研究を通して得た知見を早期実施が必要な部分と, 長期にわたる計画とに分類し論述した。また, 経済的均衡, 社会的協調, 生態的バランスに基礎を置いた新たな生産デザイン教育の展開は, 単に開発途上国のみならず, 文明社会病がすでに発生している高度工業化社会にとっても有効なデザイン思考とその領域の拡大につながることを示唆して, 著者は本論文を結んでいる。

## 審 査 の 要 旨

1945年に向い, 単一目的に集約された科学・技術は生科学, 通信・電子・光・音響・エネルギーや材料工学等に多くの結果を生んだ。その43年後の現在, 偉大なパラドックスとはいえ, 過去の様に, 具体的な素材を加工し, 人間の生存に必要な機器を計画・設計することの上に, 前記の結果をふまえ, ある時は非可視的な媒体を人間の意図によって操作し, 心に画く像をさまざまな具体としてシミュレートする時代にある。それは, まさに近代世界の功罪を集約し体現している現象である。

一般論として海外からの研究者, 特に途上国からの研究者にとって, そうした現実の正しい理解

は不可能に近いが、いかなる教育の力によっても、皮相的な理解固執の態度をぬぐいさり得ない。

その点、本研究の著者は冷静、沈着な個性と寛容な国際感覚、不屈の努力によって所期の研究目的を達成し、結論を導いたことは高く評価される。

本来、複雑に絡み合い、時々刻々と変化する動態的素因の集合としてしか捕えられない与えられた条件に対し、安易な定量的手法をさげ、世界的、国家的、地域的視座と、一般、特定、個別的な解析・評価の段階を求め、その方法および方法論を確立し得たこと。また、多岐にわたる文献、資料や1960年以降の多くの開発報告書を公正に理解して結論に導びいたこと。高度工業化社会が、近代造形運動展開以降築いた工業デザインの実践、教育内容の正しい理解と止揚の上に立って、意図した環境条件に適した高等教育教科課程を築いたこと。以上の諸点は独自性のある十分な研究結果の水準に達していると認める。

ただ惜しまれることは、提案する教科課程を使い、与えられたフィリピンの状況におけるの課題設定と事例研究の一、二を得たかった。

よって、著者は学術博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。